大矛盾をどう説明したか。

「故天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身行、拂亂其所爲、所以動心忍性、曾益其所不能」と告子下篇に云つてゐるのは志士の困苦を天の善意と見たのである。しかし斯くの如き樂天的見方でのみ善人君子の逆境不運の事實をかたづけて了ふ事が出來たであらうか、彼が胸中に燃ゆる理想を實現ささうと取かかつた齊國に於ける夢が破れ、失意怏々の心を懷いて其の國を去らうとする時、充虞と云ふ者が問ふて云ふには「夫子不豫の顏色あり。然るに前日之を夫子に聞く、曰く君子は天を怨まず、人を尤めずと」。恐く此の問ひは不豫の色をしてゐた孟子の胸中にはギクッとこたへた事であらう。其の時の孟子の答は「彼一時、此一時」との暗示的なものであつた。若し此の語を趙註の善意的解釋を取らずして朱註に從ふならば孟子も亦人間運命難の嘆なきを得なかつたのであつた。此の不滿、此の矛盾を孟子はいかに解釋したか、それは孟子の天命に對する思想を檢してわかる事である。なほ一回の講說を費して此の事を述べて見やう。

（次號完結）

英吉利と埃及問題（三）

大川周明

一

埃及に於ける排英運動が、次第に其勢ひを加へ來れる時、サー・エルドン・ゴーストに代りて名高きキチナー將軍が一九一一年埃及に赴任した。而して將軍の威名は、少くも表面的に埃及國民を威壓するに充分であつた。かくて將軍は埃及に於ける政治的不安は、決して恐るゝに足らずとなし、其の直接の原因を主として伊太利のトリポリ侵略に歸した。故に將軍は其の最初の報告に於て、埃及に於ける政治的不穩は、『伊太利が突如土耳古に宣戰し、且トリポリ及びシレナイカを侵略せること』によりて激成されたものであるとした。而して『無責任なる埃及新聞の惡意ある煽動に拘らず、埃及國民は最も賞讃に値する自制力を示した』と述べて居る。一九一三年三月二十二日附の第二回報告に於ても、將軍は巴爾幹戰爭が埃及に對して大なる影響を及ぼさゞること、埃及には重大なる政治的不穩なきことを言明した。さり乍ら此は將軍の誤りであつた。埃及不安が假令表面に著しく現はれなかつたとしても、內實に於ては既に此時に於て極めて險惡となつて居たのである。

此年即ち一九一三年、英國は埃及の法律を改革した。此の新しき組織法によつて成立したる立法議會は、其の本質に於て改革以前の夫れと大差なかりしに拘らず、最も重要なる一事に於て舊來のそれと異つて居た。それは新議會に於て議員の大多數が實に國民主義者たりしことである。而して其首領たりしは曾て司法大臣並に文部大臣たり、且其人物はクローマー卿の推稱を博せるサアド・パシャ・ザクルールの其人であつた。かくて其の全開期中、議會は强烈且赤裸々に英國の支配に對する反對の叫びを擧げたのである。

「道」第160号(1921.8)

かゝる間に世界戰が起つた。言ふまでも無く法律的には埃及は依然土耳古帝國の一部であり、土耳古皇帝は埃及軍隊を左右するの權を握つて居た。一九一四年八月四日、英吉利が獨逸に宣戰せる時、獨逸が一切の手段を講じて埃及に於ける英國勢力の顚覆を試むべきは、萬人の等しく豫期せる所。蓋し在埃及獨人は、極力排英熱の鼓吹に努めた。埃及が土耳古帝國のインテグラル・パートとして表面的に承認されて居る以上、獨人が埃及人に國民的感情を鼓吹することに對して、英吉利は何等法律的の制裁を加へることが出來なかつた。

英吉利は此の難局に處するため、埃及政府に强要して、獨墺と交戰狀態に在ることを承認せしめんとした。かくて八月六日、時の埃及首相フサイン・ルシディ・パシャは『英國守備軍の埃及駐屯は、埃及をして英國の敵國の攻擊を受くべき地位に在らしむ』との理由の下に、『內閣の決議』として事實上對獨宣戰を布告した。こは英吉利にとりては已むなき手段なりしにせよ、明々白々に一個の違法行爲である。蓋し土耳古・埃及條約に從へば、埃及は唯だ土耳古皇帝を通じてのみ、外國と參戰し得るのである。故に上述の如き埃及の行動は、明かに土耳古の主權を否認せる一個の叛逆である。英吉利側では、土耳古皇帝の埃及に對する主權を承認せずと云ふことを聲明しなかつたけれど、事實に於て此時以來埃及は全然土耳古から獨立したのである。此事は三個月以後に英土の國交斷絕せる時、最も明白になつた。法律的に言へば英國の對土宣戰は、同時に埃及に對する宣戰でなければならぬ。何故ならば埃及は土耳古の一部であり、且埃及軍隊は土耳古軍の一部であるから。而も是くの如きことは全然無視せられ、蹂躙された。

三

この形勢混沌たりし時に於て、埃及王アッバス・ヒルミ・パシャはコンスタンチノープルに居つた。王は親土兼親獨主義者なりしが故に、英吉利を憎んで其の羈絆を脫せんと望んで居た。故に王は戰前より既に國民主義者に多大の同情を寄せて居た。ヴレンテイン・チロルは、王に就て下の如く述べて居る。

『彼は埃及の國民主義に排外主義、殊に排英主義を鼓吹することによつて、此の主義から其の最上の要素を取去らうとした。維也納で人となり、議會制度を輕蔑し、帝王神權說を信奉するやうに育て上げられた彼は、吾等が埃及に創めた未熟なる代議體を邪路に導くことに成功した。而して議會をして自己の恣まゝなる意志の障碍物たらしめざらんため、彼は議會の全勢力を、空漠たる排英の論議に傾倒せしめた』と。

王に對するチロルの人身攻擊、並に其の動機に關する憶測の當否は吾等の知る所でない。が、兎に角王の親獨政策は、英吉利に與ふるに埃及を土耳古より分離せしむる口實と機會とを以てした。かくて一九一四年十一月初旬の戒嚴令施行となり、嚴重を極めたる監察となり、遂に十二月十八日に及んで下の如き宣言を見るに至つた。曰く『埃及は英吉利國王陛下の保護の下に置かれ、今後英吉利の一保護國たる可し』と。而して翌十九日、更に下の如き宣言を見た。曰く『前埃及王アッバス・ヒルミ・パシャ殿下が、英吉利王の敵國に通じたる行動に鑑み、英國政府は殿下を埃及王位より退かしむるを至當と認め、之を埃及サルタンの尊稱と共に、ムハムマッド・アリ家の最年長者フザイン・カミル・パシャ殿下に奉呈し、殿下は之を受諾せられたり』と。かくの如くにして埃及は、約四百年の後、土耳古帝國より分離するに至つた。

もと聯合國の間には、戰爭終結後、列國合意の上でなければ、斷じて戰時中に領土の變改はせぬと云

ふ協商が成立して居たのだ。英吉利が埃及を保護國にしたのは、明白に此の協商に違反したものであるが、不思議にも何處からも非難や反對の聲を聞かなかつた。

四

叙上の如き英吉利の處置が、埃及人を憤激せしめたことは、言ふまでもない。加ふるに戰時に於ける英吉利の埃及人に對する態度は、一層彼等を慷慨せしむるに十分であつた。英吉利は『埃及國民に何等の助力を求めず』して、戰時の全負擔を荷ふべきことを約束し乍ら、幾度となく苛重なる負擔を彼等に課した。埃及の民論に不完全ながらも發表の機會を與へる爲に創設せられたる代議體は、地方でも中央でも共に開會を許されなかつた。國内を通じて言論文章の檢閲は、非常識に嚴酷であつた。强制勞働の手段は、從來忠誠なりし農民をすら、驅つて英吉利の敵とした。

かくして英國政府は、知つてか知らずしてか、國民主義者の排英感情に油を注いだ。聯合國側の聲明——殊にウイルソン、クレマンソオ、ロイド・ジョージの主張せる小國民自決の權利に對する聲明を武器として、埃及國民は盛んに『完全なる獨立』に對する要求の聲を擧げた。休戰締結後二日、彼等は正式に保護國の取消と獨立承認とを要求した。英吉利の最高委員サー・ウインゲートは、之に答へて『予は埃及の將來に關する本國政府の意嚮を知らず』と述べた。之に對して埃及側からは『然らば埃及は代表者を倫敦に派して此件につき商議せんとするが故に委員派遣を許可せられたし』と提議した。此の提議も亦拒絶せられ、埃及首相ルシディ・バシャは之が爲に辭職した。

於是國民主義者首領サアド・バシャ・ザクルノルは、ロイド・ジョージ、クレマンソオ、オルランド、

ウイルソンに向つて、彼等が戰爭目的として掲げたる高遠なる主義を、埃及に適用せられたしと訴へた。されど此の訴願も亦斥けられた。

五

英國官憲が極力妨害せしに拘らず、國民主義者は巴里平和會議に列席せしむべく代表者を選んだ。平和會議が開催せらるゝや否や、代表者等は各國の講和使節に向つて、獨立黨の要求と其の計畫とを明記せる書類を送致した。而して其中には、メヒメット・アリ及び其後繼者の治世に於ける埃及の進歩を指摘した。そは英國が埃及の爲にせる施設を賞讃せしと同時に、英國がグラットストン以來屢々繰返せる聲明を力説した。そは戰時中に埃及の聯合國に對して爲せる貢獻を高調した。

然るに英國は、埃及代表者の一行が、愈々巴里に向つて出發せんとするに當り、旅行券の下附を拒んだ。國民主義者は憤激に燃えた。而して時も時、彼等のアスピレーションを全然眼中に置かぬ埃及改革案が出來上つた。之を知つた彼等は、憤激の絶頂に達した。

埃及國内到る處に地方委員會が出來た。到る處に演説會が催されて、自由を求むる叫びが全國に響いた。いづれの方面を見ても、形勢は容易ならぬものとなつた。然るに英國政府は、此の運動を以て政治的不平家の煽動に因る淺薄なるものと多寡を括つた。而して一九一八年三月六日、サアド・バシャ・ザグルール以下九名を召喚し、公安を害し、官憲の仕事を妨害するに至るべき一切の行動に出づるなかれと嚴戒した。この會見は、早くも人々の間に知られ、代表者等は之に對して道理ある抗議を發表した。而も官憲は之を以て彼等の挑戰と解し、十一月八日、ザグルール・バシャ以下四名の首領を逮捕し、密かに之をカッセルニルの營倉に送致した。翌日彼等は更に埃及よりモールタ嶋の監獄に運び去られた。此事知れてから、數日ならずして、全埃及は蜂の巣を破つたやうになつたのだ。